

1 研究テーマ 豊かな生活のためのコミュニケーション能力の向上を目指して

～ 児童生徒の力を引き出す「支援」の工夫～

2 研究テーマについて

これまでの共同研究の経緯から

平成12年度から14年度までの3年間（研究テーマ「一人一人のよさを伸ばす支援のあり方を求めて」）と、15年度、16年度の2年間（研究テーマ「児童生徒一人一人のニーズに応じた支援の工夫」）、本校では全校の研究テーマは定めるものの、より児童生徒一人一人の「よさ」や「ニーズ」に着目していくために、各学部の課題に応じて研究領域を定め、共同研究に取り組んできた。

その成果として、学部内での研究は深まり、児童生徒一人一人の課題の解決に向けて大きく前進するとともに、学部内での指導充実を図ることができた。しかし、その反面、学校評価の中でも小中高の連携が課題として挙げられ、指導内容や教科領域を共通のものとして、小中高の連携や一貫した指導を重要視していきたいという考えが多く挙げられた。17年度から昨年度まで（研究テーマ「自分も相手も大切にする児童生徒の育成を目指して」）、小中高で系統性を重視した身体や性に関する指導を行ってきた。今年度も小中高の連携や一貫した指導の流れを意識しながら共同研究を進めていきたいと考えている。

研究テーマの「豊かな生活のための」とは、言い換えれば「生活する力」（本校では「生きる力」を「生活する力」と考えている。）を育むことである。また、本校教育目標の「健康で人間性豊かな児童生徒の育成」から、「身近な集団に参加し、相手とのかかわり合いの中で支え合って生活できるようになる。」ことを目指し、子供たちが現在も将来も、健康で生き生きと生活することを願ったものである。本共同研究を通して豊かな生活につながる対人関係の成立や自己決定の機会が増えればと考える。

これまでのコミュニケーションに関する指導について

昨年度末に実施した教員アンケート結果から、自閉症児への指導、基本的な生活習慣の形成、コミュニケーション能力の向上に関する課題があると考えている教員が多いことがわかった。自閉症児への指導においても、基本的な生活習慣の形成においても、児童生徒の伝える力、コミュニケーション能力の向上は不可欠である。

そこで本校のこれまでのコミュニケーションに関する指導を顧みるとともに、課題の焦点化を図るために4月に再び教員にアンケートを実施した。その結果、本校のこれまでのコミュニケーションに関する指導について次のようなことがわかった。

指導内容と方法について

- 各学部ともこれまで指導してきた内容と、指導が必要と思われる内容がほぼ一致している。
- 指導してきた内容を見ても小中高である程度系統性が見られる。
- 要求伝達系のコミュニケーションと相互伝達系のコミュニケーションでは障害別で教師が児童生徒に必要なと思っている優先順位にばらつきがある。

教育課程では、その指導内容方法が見られるが、指導項目表に系統的にまとめられているわけではない。
担当している児童生徒の障害別によって必要とされる内容も変わってくる。
保護者からの相談は障害別で多岐にわたる。

保護者からの相談

- 要求伝達系のコミュニケーションにかかわる相談が多い。
- 相互伝達系のコミュニケーションにかかわることは高等部になると増える。

思いを伝える手段がもっと増えればと保護者は願っている。

悩んだり、困ったりしたこと

- 指導はするがうまく定着させられない。あるいは、指導方法での行き詰まりの悩みが多い。

指導が必要と感じ、指導しているが定着に至るまでが課題

- 指導していく上で今後行っていかなければならないこと
- ・ 家庭との連携という回答がとても多い。
 - ・ 研修，発達年齢，生活年齢に応じた指導，系統的な指導など多くのことを必要と感じている教員が多い。
 - ・ 小中高の系統的な指導を目指して，3グループほどで縦割りで検討
 - ・ 実践事例情報交換会，実態別に（重複，自閉，知的）
 - ・ 発語の有無，自発的要求の有無などの実態別
 - ・ 障害別の指導，摂食コミュニケーション，遊びの指導，自立活動でコミュニケーションを重視した指導，現在のスタイルを深めていく研修ができれば。

→ 指導を行っていく上でやっていかなければならないことがたくさんある。

以上のようなことから，研究テーマ「豊かな生活のためのコミュニケーション能力の向上を目指して」を設定し，全校で取り組んでいくこととした。

3 研究目標

「豊かな生活のためのコミュニケーション能力の向上」を目指していくために，児童生徒のコミュニケーションに関する実態を把握し，小中高の系統性を持たせた指導を考慮しながら，児童生徒の力を引き出すよりよい支援のあり方を探っていく。

4 研究仮説

小中高の系統性を持たせた指導を考慮しながら，児童生徒の実態に合ったコミュニケーションの手段を獲得させることによって，気持ちが伝わることによる心の安定や自分の気持ちを相手に伝える手段の獲得につながり対人関係が成立や自己決定の機会が増えてくるのではないか。

5 研究の方法

以下のことを通して，指導のあり方を探る。

- ・ 先進校の実践事例の研修や文献研究
- ・ 各学部での授業実践
- ・ 小中高の系統性を持たせた指導（実態別，課題別など）
- ・ 実態把握シートの検討と作成（試案）
- ・ 個別の指導計画，支援計画との関連の持たせ方を探る。

6 研究の計画及び内容

研究期間 3年・・・1年次（特に前半）は研修したり，子供たちに必要なことをもう一度考えるためにじっくり話し合ったりする期間としたい。

3年間の計画（予定）

1年次・・・	研修と各学部での指導実践 研究テーマ，研究目標，研究計画の作成と検討 先進校の実践事例や文献の情報や資料の収集 各学部での指導すべき内容の話し合い 小中高の系統性を持たせた指導の検討（研究部で） 実態把握シートの検討と作成（研究部で） 個別の指導計画，支援計画との関連の持たせ方の検討
2年次・・・	実態別グループでの指導実践 実態把握に基づいた授業実践 小中高の系統性を持たせた実態別，課題別の指導の展開 実態把握シートの修正と吟味 個別の指導計画，支援計画との関連の加除修正
3年次・・・	実践の深まりと検証 実態把握に基づく授業実践 小中高の系統性を持たせた実態別，課題別の指導の実践 実態把握シートの活用 加除修正した個別の指導計画，支援計画の活用 研究のまとめ